

# 深イ～話！

No.78

4月に天皇皇后両陛下が、パラオを慰霊訪問されたニュースをみて、はじめてパラオが戦場だったんだと知りました。そしてネットでパラオを調べたら、「ペリリュー島の戦い」の話を知り、とても感動しましたので、ご紹介します。

1919年、第一次世界大戦の戦後処理をする「パリ講和会議」によって、パラオは日本国の委任統治領になりました。パラオと聞けば、「南洋の平和な島」とのイメージをお持ちの方は多いでしょう。

パラオは第一次世界大戦後に国際連盟による日本の委任統治領となり、1992年南洋庁がコロール島に設置されて内南洋の行政の中心となっていた。

日本は委任統治時代にパラオで、ドイツの植民地時代にはほとんど行われなかった、学校・病院・道路などのインフラの整備も重点的に行いました。

日本人はパラオに米食の習慣を定着させ、なすやきゅうりなど野菜やサトウキビ、パイナップルなどの農業を持ち込み、マグロの缶詰やカツオ節などの工場を作って雇用を創出した。道路を舗装し、島々を結ぶ橋をかけ、電気を通し、電話を引いた。



パラオには、「ペリリュー島」というパラオ諸島があります。

南北9キロ、東西3キロ、高さ80メートル、全体で20平方キロのサンゴ礁からできた太平洋上の小島です。このペリリュー島で、大東亜戦争末期に、日米両軍によって実に73日間にもわたる死闘が繰り返されました。

米軍は、日本軍の兵力の約4倍、航空機200倍、戦車10倍、重火砲100倍以上が軍事力でした。

戦闘が終局に達していた11月24日、生き残った日本将兵はわずか60人足らずとなりました。

ついに、日本軍総司令部陣地の兵力弾薬もほとんど底をついたために、司令部は玉砕を決定しました。守備隊長の中川州男大佐、師団派遣参謀の村井権治郎少将、飯田義栄中佐の割腹自決の後、玉砕を伝える「サクラサクラ」の電文が送られました。

しかし、ペリリュー島で、壮絶な戦闘が繰り広げられたにもかかわらず、ペリリュー島の民間人には、ただの1人の犠牲者も出ませんでした、

日本軍……戦死者10,695名 捕虜202名

アメリカ軍…戦死者1,794名 戦傷者8,010名 ※この他に精神に異常をきたした者が数千名いた。

一般人民…陣地構築には徴用されていたが、日本軍が戦闘前に強制退避させたため、死者・負傷者ともに0名とされる。

これは、日本軍が「ペリリュー島民を戦火に巻き込んではいけません」と指令を出していたからです。

ペリリュー島の戦いが終わって島に戻った住民は、多くの日本兵の遺体を見て泣きました。  
住民はこぞって日本兵の遺体を葬りました。  
そして、日本の人たちがいつ来てもよいように、その後も墓地の清掃に心掛けました。  
この当時の様子を知る、ペリリュー島民の老人のコラム(毎日新聞)が残っています。

遠い南の島に、日本の歌を歌う老人がいた。

「あそこでみんな死んでいったんだ・・・」沖に浮かぶ島を指さしながら、老人はつぶやいた。

太平洋戦争のとき、その島に日本軍が進駐し陣地が作られた。

老人は村の若者達と共にその作業に参加した。

日本兵とは仲良くなって、日本の歌と一緒に歌ったりしたという。

やがて戦況は日本に不利となり、いつ米軍が上陸してもおかしくない状況になった。

仲間たちと話し合った彼は、代表数人と共に日本の守備隊長のもとを訪れた。

「自分たちも一緒に戦わせてほしい」と。

それを聞くなり隊長は激高し叫んだという。

「帝国軍人が、きさまら土人といっしょに戦えるか！」

日本人は仲間だと思っていたのに・・・。見せかけだったのか。

裏切られた思いで、みな悔し涙を流した・・・。



船に乗って島を去る日、日本兵は誰一人見送りに来ない。

村の若者たちは、<sup>しやうぜん</sup>悄然と船に乗り込んだ。

しかし、船が島を離れた瞬間に日本兵全員が浜に走り出てきた。

そして一緒に歌った日本の歌を歌いながら、手を振って彼らを見送った。

先頭には笑顔で手を振るあの隊長が。

その瞬間、彼は悟ったという。

あの言葉は、自分たちを救うためだったのだと・・・。

大東亜戦争終結後、パラオなど南洋の島々は米国の統治領となりました。

大東亜戦争終結により、日本が立ち去った後、パラオの公用語は英語に変わり、アメリカによる目に余る反日教育が行われました。

歴史の授業では、米国で作られた教科書が使われ、日本人による「パラオ人虐殺事件」などの掲載された、反日的教科書もありました。ところが、パラオの年長者は「そんな話はない」と否定したため、この疑わしい史実はパラオには浸透しませんでした。